

仙台教区報

発行所 カトリック仙台司教区
 仙台市青葉区本町一丁目2番12号
 ☎ 〇二二・二二二・七三七一
 編集・発行人 笹 気 直 哉

エウカリスチア



私たちの国では、有り難いことに食べ物がとても豊富にあります。食べ過ぎで困っているほどと言っても過言ではありません。

ところで、何年か前のことですが、アフリカの打楽器の奏者が演奏の合間に語った言葉が今でも印象深く耳に残っています。

「私たちの国では、食事のとき、ひとつの大きな皿に食べ物を盛ります。日本では、ひとりひとりの皿に食べ物を盛るそうです。

ちょうど食事のときに、誰かが来ると私たちの国では、その人と一緒に食事が始まります。でも、日本では、その人の分がないので食卓を片付けてしまうとのことです。」

★エウカリスチアの一年

今年の《年頭司教書簡》で司教は、「エウカリスチア（感謝と賛美）」の一年にしようと呼び掛けています。その中で「それぞれの生きる場で『エウカリスチア』に満ちた生活を送っているキリスト者が、神に呼び集められ、聖霊に促されて小教区の聖堂に参集してきます。そこで、『エウカリスチア』の典礼

祭儀が行われます。それが『ミサ聖祭』と呼ばれるものなのです。」と述べています。

さて、「神に呼び集められ、聖霊に促されて小教区の聖堂に参集して来た」わたしたちが、どのような『集まり』をしているのでしょうか。

★あなたならどうする

ミサが最後の晩餐をかたどっている訳ですから、それは食事の場、食卓を囲む場です。さいわい、教会はミサのとき祭壇を囲むような形態にしました。それはとても自然なことです。

ところで、その食卓を囲む場に突然見知らぬ人が入ってきたり、何年もミサに来なかった人がいたり、いかに汚い格好をした人がいたとすると、わたしたちはどのように対応するのでしょうか。

もしかすると、共同体の一番大きな罪は、「分裂」かもしれません。

★主が集めてくださる

フアリサイ派の人々は、「あなたは罪人

だから」という理由で、その人を排除し、疎外することによって自らの共同体を成立させていったようです。

一方、イエスは、その排除され、疎外された人々を集めました。その場が、実に食卓だったのです。

イエスにとって、食卓の場は交わり場の場なのです。イエスの仲間になっていく場なのです。それも、神としか交われない人とともに食卓を囲みました。

ミサの回心の場は、その意味で自分が罪人であることを認め、かつ、互いに許し合う場でもあるわけです。

★イエスの弟子

ルカによる福音書（24・13〜35）によると、エマオへ帰る弟子たちに、主が現れ、出会います。しかし、弟子たちはわからない。聖書全体にわたり説明を聞いてもまだわからないでも、心は燃えていた。だから無理に引き留めて、居てくださるようお願い、祈った。一緒に食事の席に着き、パンを裂いたとき二人の目が開き、かれらは変わった。

★だからエウカリスチア（感謝と賛美）

イエスは、その場、その時のありのままのその人をいつも出発点にしてくださる。そして、わたしたちがキリストのからだをいただくとき、わたしたちも食べられるものに変わっていく。人のための、そなえものになっていくということなのでしょう。

エウカリスチアは、出会いであり、力であり、変化であり、派遣なのです。

第二十五回

司牧評議会

定例会議開催



九月二十三日(土)秋分の日、午前十一時から午後三時まで第二十五回司牧評議会定例会議が仙台・元寺小路教会信徒館にて開催された。

参加者は、教区長佐藤司教以下二十四名。

☆ 議事

※司牧評議会の常任委員を改選

※司牧評議会規則に則り、信徒四名、司祭二名、修道者一名が常任委員として選出された。内藤善隆氏(北仙台)、中村信忠氏(元寺小路)、相沢裕氏(郡山)、阿部輝雄氏(一関)。ミゲル・ウアレラ師(白河)、会津隆司師(弘前)。広本千代子修道女(女子パウロ会)。

上記のメンバーは教区長佐藤司教、司教総代理梅津明生師、書記長平賀徹夫師、会計渡辺彰宏師の教区代表とともに二年間の任期を務めることとなる。

ここ二年間の常任委員会は、毎月のように開かれ、司牧評議会の発展のために重要な役割を果たしている。

※教区生涯養成委員会の動き

※教区生涯養成委員会・委員長佐々木博師より、生涯養成に関する基本方針(案)の説明があった。

・前提として、まず、生涯養成が本当に必要

なのだという意識化が大切であることを強調。対象者は全信者。特に司祭同士。

・内容は三点に要約される。①出発点は聖書。「今こそ、みことばによる信仰の徹底的な見直しと育成が必要である。そのために、みことばを、グループによって定期的に学び分かち合うことを実行する。」②エネルギー源は典礼。「生活の原動力となる典礼作り。霊的エネルギーを十分に補給できるように実践的訓練。各秘跡の根本の見直しと実践的な活用の研究。」③宣教のために派遣される。「この世界の福音化のために、積極的に世と関わり、現実の只中でキリストの道具となれるよう、特に時のしるしを読み取りながら、具体的な信仰のあかしができるように訓練する。」

・具体的には、①養成委員会のメンバーを構成する。②養成委員会のメンバーが奉仕者のための養成プログラムを実施する。③各小教区で奉仕者と委員による実施。④複数の小教区と合同で行う。

※生活の原動力となるミサ典礼を作るためのアンケート結果

※二十八教会から回答があった。話し合いがなされたが、その中心は司祭の説教に対する要望が圧倒的であった。

※カトリック仙台司教区センターの建設に関して

※渡辺彰宏師より「資金計画ならびに募金計画(案)について」説明があった。

なお、この件については、建設委員会の広報委員会から後日、詳細な説明があります。

司教様の日程



- 10月1日 教区財政問題評議会 (仙台)
- 3日 教区司祭団役員会 (仙台)
- 4~12日 国際聖体大会 (韓国)
- 14~15日 NICE推進委員会(東京)
- 16~17日 宮城県宗法連本山研修(山梨)
- 18日 学法幼・園長会 (盛岡)
- 19日 常任司教委員会 (東京)
- 20~21日 カリタス・ジャパン職員旅行
- 22日 白石教会司祭館落成祝賀会
- 23~25日 三教区合同司祭研修会
- 27日 東北カトリック学校職員研修会(八戸)
- 28~29日 カトリック看護協全国大会(京都)
- 30日 カリタス・ジャパン (東京)
- 11月5日 松木町教会堅信式
- 7~8日 カリタス・ジャパン
- 担当者会議 (仙台)
- 9日 常任司教委員会 (東京)
- 13日 司祭評議会 (仙台)
- 16日 カリタス・ジャパン (東京)
- 23日 仙台教区修女連院長会議(仙台)
- 11月27~28日 ベトレヘム会月例会(盛岡)
- 30日 常任司教委員会 (東京)
- 12月4~5日 教区司祭団月例会 (仙台)
- 10日 富古教会堅信式
- 12~15日 司教会議 (東京)
- 25日 主のご降誕 (元寺小路)

宮城・福島・青森

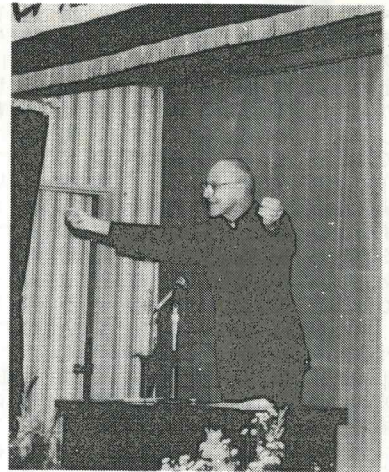
カトリック

県大会開催



カトリック宮城県大会は七月二日、仙台白百合学園にて開催。(参加者約五百名)
福島県カトリックの集いは九月十五日、桜の聖母短期大学にて開催。(参加者約三百名)
青森県カトリック信徒大会は九月十七日、青森明の星高等学校にて開催。(参加者約四百名)

宮城県のテーマは「生涯養成」。福島県のテーマは「エウカリスチア(感謝と賛美)に満ちて生活し派遣されるものになろう。」そして、青森県のテーマは「共に喜びをもって生きよう」と、NICEを起点にした、あるいは司教書簡をテーマにして、生活の中での信仰について問題提起をしている。



講師陣も全国区(?)の人気、実力兼備という方々で、宮城県は東京教区補佐司教、NICE実行委員の森一弘司教。(写真上段左) 福島県はイエズス会のベトロ・ネメシエギ師。(写真中段右) 青森県は日本カトリック宣教研究所所長、NICE実行員、東京教区司祭の岡田武夫師。(写真下段左)といった具合である。

森司教、岡田師ともNICEを踏まえながらも、その問題点すなわち、内容がまだまだ全国にいき渡っていないこと、使われている言葉にとまどいや誤解があること、NICEはあくまでも出発点であり、今後も様々な問題が起り得るし、それに皆で対応していかなければならないことなど、大会のテーマに直接入る前にその背景について結構多くの時間を費やしたことは大きな特徴と思われる。

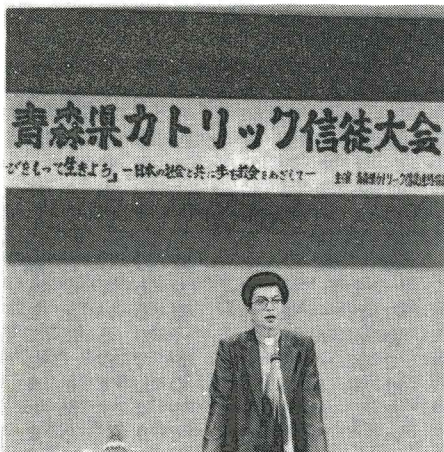
「生涯養成」や「共に喜びをもって生きよう」というとき、両講師とも結局は日本という固有の場で、ひとりひとりの日常生活を通

して解決の道を探ることを強調している。ネメシエギ師は、神学生がネメシエギ体操と名付けた由来通り、からだ全体を使った熱っぽい、ユウモアに溢れた、それでいて充分に神学に裏打ちされた講演となった。

宮城・青森は分科会形式、福島は各地区代表の発表形式を用いたが、印象深かったのは青森県の分科会。分け方に特徴があった。

十四の分科会と幼児・小学生・中学生・高校生であるが、十四の分科会は年齢別、男女別に分けられた。例えば四十代男性、四十代女性といった具合である。最後の全体会での発表は、各分科会の司会者が壇上に登り、インタビュー形式で行なわれ、各分科会とも熱の入った討論であったことが出席者によく伝わったようである。

なお、岩手県では、今年は各ブロック毎に行われることになっている。



私がキリストを
伝えるために

北仙台教会 芳賀 ヒロ子
(最終回)



「むつ小川原発」の名を借りた、サイクル施設は着実に進められています。核燃料廃棄物が、確実に安全な処分の方法がなまます。

すでに稼働している日本の原子力発電は、世界的にも高いレベルの技術で管理が行われていると言われますが、破壊力の大きな放射能のため、多くの原発では次々と部品が壊れたり、また、損傷したりしている事が度々マスコミで報道されています。ましてや、サイクル施設は、難問をたくさんかかえています。日本を除く諸外国で、脱原発に向けての動きがある中で、日本国内でも世論の盛り上がりが見られるようになってきました。つい先日、ニューヨーク市近郊のロングアイランドに完成したショーラム原発は、未操業のまま廃棄されました。建設費六千六百二十五億円です。これも住民の強い反対に加え、事故の際の避難計画が地方自治体を納得させることができなかつたため、操業許可が得られなかつたのです。

ところが、日本では伊藤科学技術長官が六月二十一日に、視察先の記者会見で「原発の災害対策は、地方自治体が中心です。原発災害対策について、特別措置法まで作って踏み込む気持ちはない。」と発言しました。この

原発に頼るエネルギー政策は、政府レベルで計画している事は明らかなのですが、国は関係ないと言わんばかりです。放射能の環境汚染は、人間の命の問題です。野の花の一つでさえ、人間の手で作り出すことができないのです。

大地震が起こったり、大事故が起こるかも知れません。最近も、危機一髪の緊急停止や四国の伊方原発施設のごく近くに、ヘリコプターが墜落するという事故がありました。原発の上に落ちたら大災害となっていました。経済性が優先される日本では、エネルギー問題を理由に、原発による電力の供給が必要といわれていますが、神は私たちに、生きてゆくのに必要なだけ取りなさいと諭されています。私たちは経済の繁栄、安易な生活を求めるあまりつい忘れがちですが、原発の燃料になるウランは、第三世界の人たちの犠牲によつて採掘され、なおかつ、廃棄物の処理を外国に頼っています。そして、国内では、過疎地といわれている青森県の六ヶ所村や北海道の幌延町に押しつけようとしています。

また、多くの教会で山谷や釜ヶ崎に援助を行っていますが、その東京の山谷から福島原発に、大阪の釜ヶ崎から若狭原発へ働きに行く人がたくさんいます。その人たちは電力会社の社員が入らない、危険な格納容器の中で働かされています。運転中の原子炉の炉心は百五十気圧、三百度から五百度Cに達するところです。しばしば作業員は、無知も手伝いマスクを外して作業するため、外部被曝もさ

ることながら、体内被曝もしてしまいます。弱い立場の人々の犠牲の上に、私たちはエネルギーの消費生活をしているのです。ここに、本当の平和はあるのでしょうか。もしも、キリストが危険な原子炉の中で働いているとしたら・・・。

原子力発電の勉強会に参加して、その中に多くの問題が隠されている事を知りました。人々との交わりの中で、一人一人が人間の命の尊さを訴えること、それが真実(まこと)の「社会に開かれた教会」の姿ではないでしょうか・・・。

「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。」(ヨハネ15:9,12)という言葉をかみしめながら、最後に、相馬司教のこトばをお伝えします。

「本気になつて社会と取り組み、やつぱりカトリックは本物だ。カトリックは勇気がある。本当のことを言うなあ、と言われるようになりたいものです。」

完

(この記事は、昨年の宮城県カトリック大会で、芳賀ヒロ子氏が講演されたものを三回にわたつて掲載させていただきました。)

編集後記

「教区報は一体どうしたのか」とのお叱りの声に返すこともなく、長い間ご迷惑をおかけし、誠に申し訳なく思っております。